井上光晴第三作品集 3

勁草書房

井上光晴第三作品集 3

1975. 3. 25.　第1刷印刷
1975. 4. 10.　第1刷発行

著　者　井上光晴

発行者　井村寿二

発行所　株式会社 勁草書房
東京都文京区後楽 2-23-15

＊定価は外函に表示してあります.

印刷　精興社

製本　和田製本工業

© 1975 Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取替えいたします.

0393-883300-1836

井上光晴第三作品集3　目次

胸の木槌にしたがえ　3
黒と褐色と灰褐色　201
終末の文学　高橋たか子　300
作品素描　佐藤義和　307
解題　312

装幀・上口睦人

井上光晴第三作品集

3

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

胸の木槌にしたがえ

1

そこから小泊海岸までなだらかに起伏する赤黒い泥土を台地にして、彼の目差す団地は寄合うように建っていた。左端に蛇行するコンクリート溝の周辺にはまだブロックの建材が積まれており、掘返した斜面のあちこちに黄色い旗さえはためいている。それでもすでに幾家族かは移住をすませたらしく、ベランダに干された布団の下に、子供の三輪車や金網のようなものが見えた。

口石常雄は両足を交互にばたつかせながら、ぺちゃんこの踵にたまったズックの砂を払除けると、形さえまだ充分にはできていない道を真直ぐ歩きだした。昨夜から一睡もしていないので、やけにちかちかして眩しかったが、あまり眠気はなかった。道端の小石を拾って投げると、予期しないような固い音が返ってきた。きっと雑木林の幹にでも命中したのだろう。彼はひとかたまりの雑草を引抜き、いちばん丈の長い草を口にくわえて嚙むと、残りを捨てた。煙草草という俗名の通り、青くさい匂いとからみあう西洋胡椒に似た風味がかすかに舌の先に漂う。彼は眼尻を拭いた手をかざして、突然光を影に変えた太陽を仰いだ。

昨夜、一晩中起きていたのは仲原の沼で蛙を釣っていたからである。蛙なら何でも食えるといいだした油井仁の顔を立てるように、三人がかりでバケツにあふれるほどの沼蛙を獲りまくったが、実際に食ってみるとあまりうまい代物ではなかった。

「唐揚げにするとうまかよ」みんなからラーメンと呼ばれている油井仁は弁解した。「焼いちゃどうにもならん」

「ぷしゃっというだけやからね」三俣吉郎はいった。彼はあまりラーメンを好いていないらしいのだが、どういう理由でか何時もぴったりくっついていた。

「まあぬめぬめしとるが食べられんことはない」口石常雄はいった。彼は別のことを考えていたのだ。みんながそれに触れたがらず、何となく自分を大目にみるようになったのは、やはりその日が近づいてきたせいなのかもしれなかった。九月の第一土曜まできっかり数えて、あと二週間しかない。もう三ヵ月も前、深夜の映画館で起ったちょっとした事件をきっかけに、彼は本気でもなくその日に自殺することを宣言してしまったのだが、何時からか奇妙な負担を感じるようになっていた。

夜明けの近い空を顫わせながら、ずんぐりした鳥が木立の間を跳上るようにして飛んで行き、火焙りにした蛙の肢

がじゅうっと音を立てた。

その夜、真夜中の十二時に開場し、満州を舞台にした日本の戦争映画を六時間ぶっ通しに上演するプログラムを組んだR市の映画館は、雨上りのためもあって、異常な熱気とわけのわからぬ昂奮に被われていた。同級生の女生徒をめぐって、衣料問屋の店員を刺した中学生の噂が大きく揺れており、その上ビールの空罐に詰めた闇焼酎が大量に出廻っていたのだ。

そして事件は第一部の終了後、休憩時間に発生した。もう五十歳はとうに越えたと思われる痩身の男が、ふらふらとステージに立つと、呂律のまわらぬ口調で演説を始めたのである。こんな乱れた世の中に生きているのはつまらないからみんな死んだ方がいい、という趣旨のことを、男はくどくどと繰返した。思わぬ飛入りの余興に、最初げらげらと笑っていた観客は、一向に引退ろうとしないばかりか、こんな世の中にのんべんだらりと深夜映画にうつつを抜かすような奴は人間の屑だ、というふうな、棘のある言葉で挑発をつづける男に、ようやく苛立った。

そんなに自殺した方がましなら、そこでやってみろ、という野次が飛び、気違い、いい加減でやめろという声がそれに重なった。すると男は「お前らの方がよっぽど気違いじゃないか。此処におる者は全部、全部だ」と怒鳴り返したのだ。

幾人かの観客に引きずり下ろされた男の代りに、なぜ自分がそこに駈上ったのか、彼はしばらくぽかんとしていた。罵声とも嘲笑ともつかぬ声が辺りを取巻き、したたかに酔痴れた頭蓋の中身を振廻すような気分でわれに返った途端、口石常雄は男のいい分に賛成していたのだ。それならお前も自殺してみろ、という声に対して、おおやってやるぞ、といい放つまでいくらも時間はかからなかったろう。九月の第一土曜という日をどうして持出したのかさえ、不分明なままに。

「やっぱり食用蛙じゃないと、それだけの味しかだしようんな」三俣吉郎はいった。

「食用蛙というても、この頃は普通の蛙やからね。食用にすればみんなそれは食用蛙になるとやから」

「そういうふうにいうならおかしかごとなるよ。食いさえすればみんな食用蛙というなら、特別にそんな名前はいらんごとなるやろう。そうやないか。赤蛙とか土蛙とかそんなふうに呼べばよかわけやろう。毒にはならんから食用というふうにはいかんよ」三俣吉郎は楯をついた。

「蛙はみんな食用になる。おれはそれをいうとるんやからね。そりゃ肉のついとるものはいくらか味の違うかもしれんが、元々食えるとだから、どっちみち同じ。おれはそう思うね」

口石常雄は黙っていた。口の中がぬべっとしてきたぞ、というような言葉で割込んでもよかったが、急にわずらわしくなったのだ。

「明日、おれは小泊に行くつもりやけどね。……知っとるやろう。心中事件のあった団地やから。……」それまで考えもしなかった言葉が、彼の口からでた。
「新聞にでとったやつか」
「何しに行く。そんな所に」
「死に損うた奴に会いに行くとさ。どんな顔しとるかいっぺん見とこうと思うてね」口石常雄はいった。
「つまらんことを考えるね」油井仁はそういうと、瓦の上にのせた肢を小枝で突ついた。
「つまらんかね」口石常雄はいった。
「おもしろかことはなかろう、そんな顔見ても……」油井仁はいった。
「おもしろいかおもしろうないか、みんな自分次第やからね。人にはわからんよ」三俣吉郎は指の先で口許を拭いた。
「そんなことをいえば、何も話はできんようになる」油井仁はいった。
「自分の考えとることが人にはわからんですまされるなら、言葉なんかいらんごとなるけんね。それはおもしろうないからつまらんというても、それは駄目とか間違いとかいうことにはならんやろう」
「駄目とか間違いとか誰もいうとらんよ」
「そういうふうにきこえたけどね」
「一応自殺志願者ということになっとるからね、おれは」口石常雄は努めて軽い口調でいった。「何事も研究が第一やからな」
「そいでも激しゅうどまぐれたな。ちょうどおれがお前んとこのおばはんとやるようなもんやからね」油井仁は自殺志願者という言葉を素通りさせた。「そいでも、四十五にしちゃ、若う写っとったな、新聞の写真は。……」
「若い時分のものをだしたとじゃないか。新聞はしょっちゅうそういうことをやりよるから」三俣吉郎はいった。
　油井仁は一旦小枝に刺した蛙の肢を顔の前まで運んだが、ふたたび瓦に置いた。
「そいでも、四十五と十七じゃ映画にもならんな」三俣吉郎はいった。
「生き残った奴は確か、窯場で働いとるとかいうとったな」油井仁は火種を掻き立てた。
　小型ブルドーザーのステップに砂を盛上げることに熱中している幼女と、傍にぼんやりと見守っている老人のかざす派手な色彩の日傘。口石常雄は一旦通り越した足を戻して、メモしてきた番号の所在をきいた。
「それは男の方。新聞はみんな間違えよったんだ。死んだ方の女はFの三〇二。ろくすっぽ調べもせずにまったくい加減なことを書きよる」見掛けに似あわぬ張りのある声を老人はだした。
「水沢という家を訪ねとるんです。……」
　彼がいい終らぬうちに、老人は汚ないものにでも触れた

ように顔をしかめてそっぽを向いた。
「どっちの方角ですか」
老人が返事をしないので、彼は敷石だけ浮きだした感じの舗道を三十米ばかり小走りに駈けると、扇形の空地にぽっくり置去りにされたような滑り台に上った。盆地のような地点から見渡すことは困難なので、いくらかでも高い場所にでてみようとしたのだ。しかしそこからみえる二棟の建物にはアルファベットの文字も番号も記されておらず、附近にはまったく人の気配さえない。
仕方なく彼は滑り台を下り、とにかくいちばん近くにみえる建物への上り口を探そうとした。すると、日傘をさしたさっきの老人が、息をはずませて近づいてきたのだ。
「水沢の家はそっちじゃないよ。そっちにはまだ誰も人は入っとらん」
口石常雄は礼をいうと、老人が引返すのと連立って歩いた。
「こんなことをきいていいかどうかしらんが」老人はいった。「水沢清次（みずさわせいじ）という青年と、あんたは知合いででもあるんかね」
「ええ」彼は嘘を吐いた。どんなふうな喋り方をしても面倒なことになるのは目に見えている。
「清次という青年はおらんぞ、きっと。毎日朝早うから出て行きよるらしいからな」
「働きにでもでとるんですか」
「働きじゃない。働きになぞでられるもんか」老人は断定するようにいった。
「そうか、そいじゃ無駄足だな」
「水沢清次に会いたければ、帰ってくる時間まで待つしかないな」
「何時頃帰るんですか」
「わからんね、それは」
くすっという声が洩れたような気がしたので、彼は首を廻した。しかし表情は動かず、白髪の不精髭にまみれた口からは別の言葉がでた。
「女たちの声がきこえる間は戻ってこれんやろう」
応じようもなく彼が黙っていると、それから一分位も経って、老人は凝った筋肉でもみほぐすように片方の手を肩にあてると、わざとらしく首を廻した。矢張り老人は内心笑っていたのだ。
ブルドーザーのステップには、さっきよりも大きい砂の山が出来上っており、幼女はそれを小さい掌でぱたぱたと叩いていた。
「さよなら」
「水沢の家に行くのかね」
「ええ」
それっきり老人は見向きもせず、口石常雄は四つん匍いになって斜面を越えると、土台だけ石垣を敷いた崖の下をくぐるようにし、ようやく見通しのきく土手沿いの道路に

でた。

何処から迷ったのか、真直ぐ中央の広場に行きつこうとして、最も外れた団地の裏側にでてしまったのだ。並んでいる建物のどの棟かに存在するBの二〇四に向って、水沢清次の家を訪ねることにあまり好ましい態度を示されなかったさっきの老人から逆に背中でも押されるように、彼の足は躊躇なく動いた。

左手下方にひろがる海面は幾分波立っており、戦時中、通信分遣隊のおかれていたという岬を前景にして、中型貨物船と漁船の行き交うのが見える。そういえば今年はまだ一度も泳いでいないな、と彼は思った。きっとあの馬鹿げた予告に縛りつけられたせいなのだ。

口石常雄は自分の気持にはっきりした輪郭を与えたことに満足し、今夜、仲間を前にしていう言葉をあれこれと探し始めた。折角期待して貰うとったのにすまんな。……なんか馬鹿臭うなったんで余興は中止。また会う日まで、じゃなかった、また死ぬ日まで。……ああしんど臭い。この際はっきりいうときますけどね、おれのお陀仏に賭けとる奴は馬鹿みますぜ。……自殺なんかするつもりはないからね、いうとくぞ。

考えだすと、どれもこれも宙に浮いてしまい、どうしてもかっこうがつかない。それをきいた瞬間、誰彼の口許を歪める嘲りを想像すると、口石常雄の胸にはまたしても落着かぬあせりに似た感情が走った。

間道へでも抜けでたように路肩注意という立札のでた個所から、突然舗装された道路がふくれ上り、それをしばらく右下りに迂回すると、彼は団地にきて初めて二人連れの女に出会った。二人とも揃ってあつらえたような白いサンダルを履いており、着ているワンピースや日傘よりも足の方が先に目につくという具合であった。

「Bの二〇四は何処ですか、教えて下さい」

「Bの二〇四……」痩せた方の女が番号を口の中で呟くと、「あらあ」という声をあげた。「それはあんた、水沢さんのところじゃないね」

「そうです」彼はいった。

「あんた、この人、水沢さんのところを尋ねよらすんよ」

「きいたよ、いま」もうひとりの女は彼の頭から爪先まで滑るような視線を走らせた。

「B棟というのはどの辺ですか」

痩せた女が一度頭上まで差上げた日傘の柄を危く落しそうになり、倒しながら持ち変えた。

「B棟はあそこやけど、清次という人を訪ねるのなら、今はおりなさらんよ」もうひとりの女も日傘をかかげて、三列に並んだ中央の建物を指差した。

口石常雄は女たちの見開いた眼ざしを背中一杯に感じながら、おれはきっと面かぶりのおっちょこちょいなのだろうと思った。上っ面のところで、芝居がかった行動しかできないのだ。彼はなるべくゆっくりした足どりで、しか

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

し、とてつもなく動悸を打つ胸を抱えて見た目よりも長い坂道を歩いた。そして気がつくと、水沢と鉛筆で書かれた表札の前に立っていた。

ブザーを押した途端、びっくりするような明るい声がして、真白に顔を塗った女がドアの蔭に顔をだした。

「何のご用」

「水沢清次さんいますか」

「清次はいませんよ」

「仕様がないな、それじゃ……」きいた通りなので、彼はあまりがっかりもしなかった。

「清次を訪ねてくるなんて、珍しか人ね」

「水を一杯飲ませて下さい。この団地は坂の上に建っとるからひどう咽喉が渇いて……」彼はきっかけを求めるようにいった。祭か舞台でなければ見られぬような濃い化粧は何を意味するのか。

「お入り」女はドアをさらに開いた。

予期しない事実に恵まれたような感じで、口石常雄は殆ど家具のない部屋に立った。

「そこに椅子があるでしょう」女は背後の丸椅子を指差した。「冷蔵庫がないから氷はないんよ」

彼は差出されたコップの生ぬるくて少し塩気を含む水を飲んだ。すると女は畳を敷いた小部屋から自分も丸椅子を持出して坐り、「清次も惜しいことをしたものね。友達がくるとわかっていたら出掛けずにもよかったのに」といった。

「仕事ですか」彼はいってみた。

「海の何処かにおるんよ」女は答えた。「あの子は、海さえ見とれば、それで気がすむとだから」

「海が好きなら、この団地はほんとによかところにあるね」

「此処は嫌らしいところよ。いくら海に近くても、住んどる人間は猫ばかりだから」女はそういうと、ついと立上って畳部屋の窓際に身を擦寄せた。「みなさい、もう集ってきた」

B棟とC棟の間に横たわる帯のような空地の日蔭に立っている女たちを口石常雄は訝しそうに見た。子供まで数えると、およそ二十人余りになろうか。いちばん隅にかたまっている者の中には明らかに先程の女がまじっており、その前にしゃがんでいるのは老婆だ。そして両の眼のすべてが彼のいる部屋に向っているのである。

「見たでしょう。あれよ」女は顎をしゃくった。「これだからろくに窓も開けられないんよ」

異様な蒸暑さの原因はそうだったのかと思いながら、彼はなおも窓の外を見つめた。水沢清次にまつわる事件のせいにしても、露骨すぎるような人々の蠢く顔。

「何時もああなんですか」

「清次がおる時はね。でも今はあんたがきとるからでしょう」

「おれが……」彼は口ごもった。「どうしておれがきたから……」
「何か起りはせんか。起ればいい。みんなは何時もそう願うとるんよ。あたしとあんたが清次みたいなことになればいいと、そう思うとるんでしょう。きっと」
激しいことを簡単にいう女のやや薄目の唇には、白い化粧に見合うような赤い紅が山型に塗られている。事件のことに触れたがらないのではなく、女の神経はもっと先の方を走っているようであった。
「迷惑だな、そいじゃ」彼はいった。
「あたしのことは構わないんよ。どっちみちいろんなことをいわれとるんだから」
「窓を開けといた方がよくはないですか」
「駄目。それは駄目よ」女はきっぱりといった。
彼はふたたび窓際に近寄り、自分の場所を定めようとするかのように、老婆の後をゆっくり横切る男を見た。ブルドーザーの附近で幼児と遊んでいた老人よりも幾分若く、登山帽をかぶっている。
「またきた」彼はいうと、壁に顔をくっつけたままの姿勢でつづけた。「いうとくけど、おれは清次とかいう人の友達でも何でもなかとやからね」
女はちらと彼をみると、間をおいて「それじゃ何しにきたんね」といった。
「何しにきたんかね、ほんとに」口石常雄はいった。「自分でもようわからんよ」
しばらく言葉のない時間が流れ、彼はもう帰らなくてはなるまいと思った。すると、女が前よりも生き生きとした口調で喋りだしたのだ。
「清次はね、あたしの子供じゃないんよ。ほんとは姉が中学を終ったばかりの時に生んだ子供なんよ。姉はすぐ死んだし、親たちは生れた赤ん坊の顔もみとうないような気持だったから、それであたしが何もかも世話をみらねばならんようになったわけね。自分の娘が生んだ赤ん坊をどうしてあんなふうに邪険にするのか、今でもわからんけど、考えてみると、親たちはまだ若かったし、娘の子供とあまり年の違わない自分の生んだ子供がおったとだから、何か嫌でたまらんようになったとでしょう。……そんなふうだから。あたしはまだ中学にも上らんうちから、清次を自分の生んだ子供みたいに扱わねばならんようになったんよ。本気でそう人からいわれたこともあるんだから。あたしが中学二年の時、うちの風呂場を修繕することになって、あたしはあの子を銭湯に連れて行ったことがあるんよ。そしたら流し場のところであたしをじろじろ見とった年寄の女が、随分若いおかあさんね、と軽蔑するみたいな口ぶりでいうんよね。あたしの子供じゃないって、そういい返してやればよかったんだけれども、何かものをいう気にもならなかったんで黙っとった。そしたら、今度は前よりも変な声をだして、ほんとにまあ、こんな若いおかあさんに子供

を生せるお父さんの顔を見たいもんだね、とこう。そしたらみんなにやにやしてあたしの体を眺めまわすし、あたしの子供じゃないと知っとる者までが、うつむいてくすくす笑ったりしとるもんだから、それはもう始末に終えんようなことになったんよ。……あたしはもう意地になって、いうならいえと思うとったから、わざと知らん顔をして清次の体を洗ってやっとった。そしたらしまいに、ほんとにこんな若いおかあさんが、どんな顔をして子供を作るのかみたいものね、と年寄の女がいったものだから、それまでくすくす笑っとった者もいっぺんにわあと囃し立てるように笑いだして、番台におった女まで覗きよったんよ。それでもあたしは辛抱して、何にもいわずに清次の体を洗ってやった。きっとこの赤ちゃんはお父さん似ね、とか、ほんとにままごとね、とか、こんなに早かったらあたしはもうおばあさんにされてしまうとか、いろんなことがきこえても、顔色ひとつ変えなかったんだから。……」

「もう帰らんといかんな」口石常雄は相手の言葉の間に挟んだ。

「外のことを気にすることはないんよ。清次が家におる時はしょっちゅうだから」

「それでも妙なふうに考えられてもつまらんからね」彼はいった。「此処にはおれとあんたしかおらんのだから」

「あたり前のことしかいわんのね、あんたも。……」女はぷいと横を向くと、刃物のような声をだした。「外のことがそんなに気になるなら帰んなさい。卑怯者。……」

口石常雄はびっくりしてその長い項を見た。卑怯者といわれる筋合いは何処にもないのだ。

「そいじゃ行くよ」彼はいった。

「もう二度とこないで」

「ああこないよ」

彼は奇妙に嗄れた声を残して二〇四号のドアを押した。あれではまるで喧嘩別れか何かの愁嘆場の科白じゃないか。階段を下りたところで、放り出されている如露に、危くつんのめりそうになりながら、口石常雄は陽の当る空地にでた。「色気違い」という子供のきんきんした声が飛んできたのはその時である。

「おれがなんで色気違いだ」彼は日蔭の視線に歯向うようにいった。

しかし、それっきり声は返ってこず、しゃがんでいる老婆の背後に、わずかな揺れが起っただけであった。坂道で出会った二人の女はまだそこにおり、登山帽をかぶった男も顔をそむけようとさえしない。口石常雄は石段の前で立止ると、わざとらしくそこにいる者を眺めまわした。

あれじゃまるでアフリカを舞台にした映画じゃないか。彼は自嘲するようにそう考えると、胸の中で思いっきりの悪態をあびせかけながら、一度も振返らなかった。

真白に塗りたくった女と出会ったことが、得体のしれない暗澹たる気分になってのしかかってくる。もう二度とこ

ないで、などとどうしてそういう言葉を使うのか。
意外なことに、ブルドーザーのステップで相も変らず幼女が砂山にトンネルを穿っており、老人は彼を見ると、一瞬話しかけたそうな素振りをみせたが無理矢理無視を装う表情を示した。
「おかしな団地やね、此処は……」彼はむしゃくしゃする心を押えかねていった。
「おかしいのはどっちかね」老人はわけもきかず、正面から反撥した。「本人がおらんとわかっとるのに、心中のかたわれを訪ねよったりして。……まああんたの魂胆を見抜けんというわけでもないがね」
「あきれ返ったもんだ」彼はいった。「勝手な邪推ばかりしやがって……折角作った団地にみな入りたがらんわけがはっきりわかったよ、これで」
「お前みたいな奴は……」
「死んでしまえか」彼はいった。「そう簡単にはいかんよ。死ぬのは順番が決っとんだ。あんたはまあ、来年辺りのお迎えだね」
「なげかわしい世の中になったもんだね」
「余計もんはなるべく早うくたばってしまうことだ」
老人はいきなり足下の石をつかんで投げ、彼は避けずともよい体を大袈裟にゆさぶりながら、掌を擦合わせてからかった。南無阿弥陀仏。
積んであるのか、撒き散らしているのかわからないような砂利を踏んで行くと、間近に海の匂いがし、砂地に匍いつくばった雑草に乱れ舞うひとかたまりの小さな黒い蝶を目掛けて口石常雄は走った。すると、前方の浜辺に思いがけぬ程の人影があらわれ、何かを懸命に探しているらしい様子が見えた。
彼が近づいて行くと、麦藁帽をかぶって腕章をつけた男が立ちふさがり、片方の手で追払うような仕種をした。
「部外者に入られちゃ困るんだな。いま懸賞の宝探しをやっとるんでね」
懸賞の宝探し。彼が怪訝な表情をすると、男は海辺に何本か立てられている旗竿を指差した。
「タイガージュースですよ。あんた入場券持ってきたんじゃないでしょう」
「いや……」
「入場券がなければ仕様がないな。こっちは夕方まで借切ってるんだから」
私有でもない海岸を誰から借切ったのか。彼は胸までかかった言葉を押えると、浜辺と平行して歩きだした。
「何処に行くのかね、一体」
「タイガージュースにいちいち行先をいわにゃいかんのか」
口石常雄はそういうと、いきなり方向を変えて、宝探しだという浜辺に足を向けた。
「待たんか、おい。駄目じゃないか」

彼は自らロープをまたいだが、制止する声はそれっきり追ってこず、幾分拍子抜けした気持をぼかすように、体を反転させようとした。だが、砂地を支えた腕が思うようにきまらず、したたかに腰を打ったのだ。

腕章をつけた男が見ていたかどうか。彼は起上がると、弾みをつけたように半袖のシャツを脱ぎ、それからズボンを外した。折からの嬌声は自分に向けられたものかどうか、彼は準備体操もせず海に飛び込んだ。思いのほか海は冷たく、赤潮に似た汚れが一面に漂っていた。

しかし、引返せば連中の物笑いになるだけだ。彼は行けるところまで行こうと心を決めた。あいつらが不安と危険を感じだす沖合まで。

二百米程も泳いだところで左足の足首に藻がからまり、彼はそれをほどいた。ふっとそれ以上沖に向うのは、馬鹿気たような感じをおぼえたが、かまわず泳ぎつづけた。

去年の夏にも、いまよりもっと冷たい海に入ったことがある。ラーメンと相乗の岸壁に行った時だ。防波堤から水道をへだてて打上げられた廃船まで渡ろうとして二人は五十米も行かぬうちに体がしびれたようになったが、それでも泳ぎ通した。

次第に波しぶきが顔にかかるようになり、彼は歯をくいしばって懸命に手と足を動かした。引返すかという思いに重ねて、相乗の時にくらべれば楽なもんだと自分にいいきかせながら、彼はなおも波をかぶった。

今更冗談半分なんていわれちゃ困るよ。おれはお前がやってしまう方に賭けとるんだ。

勝手に賭けやがったくせに。

勝手でも何でも賭けは賭けさ。お前にやめたなんていわれたら、それこそばあになるんだからね、こっちは。

口石常雄は平泳ぎを抜手に変えてようやくふくれ上ってくる自問自答に決着をつけようとした。はいみなさん見事にかつがれましたね。あれはみんな出鱈目でした。彼は実際に声をだして叫んだ。

胸の中にふっと、一ヵ月ばかり前河岸の屋台で偶然出会った見知らぬ男の、病み疲れたような顔と示された好意がよぎる。口石常雄はそこでチャンポンを食べたのだが、金を払おうとすると斜め向いに坐っていた男が、ぼそっとした声で、「あんちゃんの分、おれに払わせてくれんかね」といいだしたのだ。そしてわけをきくと、「何時かは映画館で大分おもしろか話をきかせてもろうたからね」といい置くように立ち去った。

岸辺の方から呼びかけるような声がしたが、もしかすると空耳なのかもしれなかった。彼はふたたび体を平らに戻し、休息するためにしばらく立ち泳ぎをした。

矢張り、岸の方では誰かがおらんでいるのだ。しかし、それが彼に向けられているものかどうかよくわからない。口石常雄はさらに浜辺を背にして、十米ばかり抜手を切ってみせた。どっちみち引返さねばならないのだが、人々が

彼を見ているかもしれぬと思うと、体に張りのようなものが生れたのだ。ざまあみろ、と彼はいった。お前らが騒ぎだすまでは誰が戻るものか。

岸辺の声はようやく高く、幾つも重なりあうようになり、「帰ってこおい」という声もかすかにきこえてきて、今は自分に向けられていることを、口石常雄ははっきりと知った。

2

およそ百匹に近い潮まねきが片っ端から棒切れで叩き潰されるのをおれは見ていた。パンツだけを身にまとった子供たちは、気違いのように浜辺に散らばる赤い浜蟹を打つ。おれがそこにいるので、わざと止めないのか。まだ幼稚園に通っているかもしれない女の子ひとりをまじえた十二、三歳の悪童連。

潮まねきの一匹はひしゃげた胴体をひきずりながらなおも海の方に走ろうとして、力尽きてか砂丘の窪みに蹲った。さらにもう一匹は仲間の死骸にくらいつくように重なったまま泡を吹きだし、それをまた棒切れがしたたかに打ちのめした。

「蟹潰けでも作るか」

「砂の蟹潰けはおもしろかぞ」

「蟹潰けならもうちょっと潰さにゃならんね。このままじゃ鋏が咽喉につかえよる」

少年の声がどこかよそ行きで上っ調子なのは、きっとおれにきかせようとしているからだ。人の気配がしたので振向くと、はばの広い麦藁帽をかぶった二人連れの男が近づいてきた。揃って長袖の白いワイシャツとビニールの草履。まるで恋人同士のように肩を寄せ合い、手さえも握りしめて、子供や蟹に一瞥も与えず通り過ぎる。もうとうに五十歳は越えていそうな二人の背中を見送りながら、おれは胸の中で、療養所の奴かと呟く。

何年か前の夏、八木原にある結核療養所で男同士の三角関係を背景にした傷害と心中の連続する奇妙な事件が起きた。男同士だから心中とはいえぬのかもしれぬが、その話をしてくれたのは、今はもういない羽友康子（はおともやすこ）であった。

八木原の結核療養所にはもう十年近く、同性愛を噂されているAとBの中年男がおり、その二人が新しく入所してきた青年の患者Cを奪い合ったあげく、BがCの腕を果物ナイフで傷つけた。警察の留置場から保釈でだされた日の夜、BはAと相擁して岬の断崖から投身して果てたというのだ。

「どうもようわからんね」おれはいった。

「療養所に新しゅう入ってきた男を自分のものにしようと思うて喧嘩したわけやろう。前から仲のよかった二人がどうしてそんなふうになったとか、……それはそれとしても、喧嘩相手じゃなくて、どうして若い男の方を傷つけたんかね。しかも今度は警察からでてくると、前から仲のよ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com